

ただ、この宴席で花を目の前にして自身の栄耀は少なく。曲水に向かつて我が身の沈淪を恥じている者がおります。位はわずかに正四位下に過ぎず、公卿の地位に遠く隔たったまま運命のつたなさを思い知らされております。職はただ東宮学士であるのみ、年齢だけはあの漢の太子を導いた夏黄公や綺里季に近づきすっかり年老いまして。

このような私めが本日は誤って序者となっております。ご列席の皆さまから何といわれるであろうかと畏れる次第でございます。

ここに集う人々はおのおのその所を得て青い苔の上に坐り

酒を清らかな流れに浮かべて次々と廻して飲む

曲水の流れはそそぐ、王羲之が催した古の三月三日の宴の時と同じように

咲き乱れる花は薫る、万代の後までも続く左大臣邸での宴の盃の上

波に映った月のごとき盃を廻していくのは明府の指示に応じてのこと

水辺を渡る風の中で酒を酌み交わすのは遅れてきた者に罰盃を命じるため

こうして酔ったおかげでやっとわかった、(古人が言ったように)
春は楽しむべきなのだ

しかし愚かな学者である私は、洛陽にその才能を謳われた賈誼のような詩文の才がないことにやはり恥じ入るのである

(平成十一年五月十日受理)

こは賈誼のごとき文才をいう。「終童山東之英妙 賈生洛陽才子〔善曰、賈誼雒陽人也。年十八以能誦詩、屬書。稱於郡中。文帝召以為博士。時二十余〕」へ『文選』卷十「西征賦」潘岳〈

【参考】

『新撰朗詠集』上「三月三日付桃」に本詩序の「昔成王之叔父周公旦」以下の隔句対と「醉郷氏之俗（ただし『新撰朗詠集』では「醉郷国之俗）」以下の隔句対、及び詩の頸聯を採る。

【通釈】

七言。三月三日、左大臣の曲水の宴に伺候し、皆で「流れに酒を浮かべる」という題で詩を作る。左大臣様の命に応じての詩一首。（廻という字を韻にする。序を合わせる）

そもそも曲水の源というもの、その由来は久しい。

昔、周の成王の叔父周公旦は洛陽を都として盃を浮かべ、曲水の始まりとした。

今、天子様の御叔父左大臣様も同じく洛陽（左京）に居を構えて酒宴をお開きになる。これは、天子の政をお助けする余暇に、すばらしい春の風物の過ぎ去っていくのを惜しむためであろう。

今、公卿、殿上人、蔵人、儒者たちで、詩に巧みなこと天下に甚だ

優れた者たちが木立の中に長椅子を並べて座し、揃って威儀を整え立派な詩文を作る。

盃を水上に浮かべ、酒を酌んでは詩文を作る。

盃のやりとりの分量を波の心に任せ、岸沿いに流れてくる盃の速度に早さ遅さがあるに至っては、あたかも、醉郷氏の人々が酒飲みの鄭泉を連れて舟で行き、劉伶の酒徳頌の文が曲がりくねった巴字によつて風情を添えられるようにきままなものだ。

ああ、どこの場所で今日の三月三日の花と水を愛でないことがあるうか。だが、槐庭にありながら桃源に遊ぶ者（大臣の位にいながら世俗を離れた風流の地に遊ぶ者）はやはり稀である（左大臣様はその稀なお方だ）。いったい誰がこの場所の風流に心を動かされないだろうか。だが、朝廷に仕える高官でありながらすばらしい詩文を作る者には限りがある（今日の参加者は皆そういう人達だ）。今日の曲水の宴はまことに盛事である。

我らが左大臣様は何と優雅なお方か。

左大臣様が賢人を推挙なさるのは、あたかも妙なる楽の調べのよう（に巧み）で、政典を琴箏のように手元に置いてお遊びになる。

自他の才をお養いになるのは、あたかも味の濃い果物のよう（に滋味深く）、道徳を梨棗のようにその味わいを楽しんでいらつしやる。今日の宴も、ただ美しい舞、清らかな音楽で耳目を楽しませ、さまざまな味あふれる肴を堆く盛り上げているだけではないのである。

家文章』卷一「八月十五夜、蔽閣尚書、授後漢書畢、各詠詩、得黃憲」
 (『本朝文粹』卷九所収)〈

◎取次Ⅱ酒宴の席で、盃を次々にまわすこと。「左右大臣共連座之處、獻盃并少納言可取次酌」へ『西宮記』卷二十「令行節会等飲酒事」〈

◎右軍三日会Ⅱ王右軍こと王羲之が晋の永和九年三月三日に、会稽山陰の蘭亭で曲水の宴を行った故事。四「七言歳暮於藤少侯書齋守庚申同賦明月照積雪各分一字応教一首」右軍之会の語釈参照。

◎東閣Ⅱいわゆる、『蒙求』「漢相東閣」の故事を踏まえる。ここは、詩宴の場となった道長邸を指す。五「八月十五夜陪員外藤納言書閣同賦月照耀前竹応教」の「公孫弘」の注、及び、七「七言。秋夜陪右親衛員外垂相亭子守庚申同賦秋情月露深詩」の「公孫弘之開東閣」の注参照。

◎波月Ⅱ波に映った月。ここは、水に浮かぶ盃を波に映った月に見立てた。「風荷揺破扇 波月動連珠」へ『白氏文集』三三二九「南塘暝興」〈「況乎、竹霧、蘋風、沙煙、波月、陰晴、踴晦、有不可形容者」へ『本朝文粹』卷十二「池亭記」兼明親王〉

◎明府Ⅱ宴席で酒令を行う人。「録事、明府」(行酒者。李白諸飲酒、皆置明府一員。扱精神穎悟者充)、当盃、擬把、謂之四座』『西宮記』卷二十「後到」〈

◎沙風Ⅱ汀を渡る風。水辺を吹く風。「飛過沙風紅袖拳」へ『本朝麗藻』卷上「度水落花舞」源明理〉

◎斟酌Ⅱ酒を酌み交わす。「騰觚爵之斟酌兮 漫既醉其樂康」へ『文選』卷十七「舞賦」傅毅〉

◎後來Ⅱ後到に同じ。押韻の関係で、去声の到の替わりに上平声の来を用いた。遅れてきた人。酒宴に遅れた者は、罰盃を飲まねばならなかった。「五巡後到着者、可行三盃。七巡後到者、可行五盃。十巡以上到者、可行七盃」へ『西宮記』卷二十「後到」〈

◎春可樂Ⅱ「春可樂」の語が、晋の夏侯湛や王虞らの「春可樂賦」のごとく詩文の題となつて踏まえる。「春可樂兮。樂東作之良時。嘉新田之啓萊。一略一春可樂兮。樂崇陸之可娛。登夷岡以廻眺。一略一招君子以借樂。携淑人以微行」へ「春可樂賦」夏侯湛『芸文類聚』三「歳時上」春所収〉「春可樂兮。樂孟月之初陽。冰泮渙以微行」へ「春可樂賦」王虞『芸文類聚』三「歳時上」春所収〉「自古人言春可樂何因我意凜於秋」へ『菅家文章』卷四「春詞二首」その一〈

◎魯儒Ⅱ魯は愚かなこと。愚かな儒者を指す。匡衡は詩序中で二度、自らを「魯魚の疑決しがた」き者と称している。「如予者 江家釣名魯魚之疑難決」『暮春右大丞亭子同賦逢花傾一盃詩』「匡衡 江家釣名魯魚之疑未決」『七言暮秋陪左相府書閣同賦寒花為客栽応教一首』。なお、紀在昌「北堂漢書竟宴詠史。得蘇武」へ『本朝文粹』卷九に「垂訓無厭、已居魯儒之宗」とある「魯儒」は魯国の儒者、すなわち儒者一般の意で、愚かな儒者を指すのではない。

◎洛陽才Ⅱ前漢の賈誼のこと。若くしてその才を文帝に認められた。こ

◎梨棗梨と棗。「用梨棗橘栗四種之果」〔隨書〕 礼儀志〔〕

◎妙舞清歌清らかな歌と美しい舞。「酌蒲桃、坐柘覬、命妙舞、徵清彈」

〔芸文類聚〕「楽部」舞「舞賦」簡文帝〔〕「公子王孫芳樹下 清歌妙舞

落花前」〔〕「全唐詩」「代悲白頭翁詩」劉廷芝〔〕

◎悅耳目目と耳をよろこばせる。「娛心意悅耳目者、必出於秦」〔〕「文選」

卷三十九「上書秦始皇」李斯〔〕

◎綺肴多くの種類の肴。「八珍盈彫俎、綺肴紛錯重」〔〕「翰曰」略「肴膳也。

謂、其品色如綺文」〔〕「文選」卷三十「數詩」鮑照〔〕

◎玉饌すばらしい飲食物。「矜其宴居、珠服玉饌」〔〕「文選」卷五「吳都

賦」左思〔〕

◎榮耀さかえ輝く。榮耀を求め、沈淪をかこつことは匡衡の詩文の特

徴の一つ。「幸到繁華榮耀地 姓江學士任浮沈」〔〕「江吏部集」卷下「暮

春同賦花影滿春池〔〕「微藜独耻少榮耀」〔〕「江吏部集」卷下「七言重

陽侍宴同賦花菊映宮殿〔〕「製詩」〔〕「拾紫手句榮耀露 鳴珠佩染德音風

江楓葉落沈淪久 籬菊花遲採擢空」〔〕「江吏部集」卷下「秋夜守庚申同賦

蘭以香為貴」〔〕

◎正議大夫正四位のこと。匡衡は長保五年十一月に正四位下に叙せら

れた。〔〕「中古歌仙三十六人伝」〔〕「正議大夫、謂正四位上也」〔〕「拾芥抄」

官位唐名部」本来正四位上を意味する「正議大夫」を正四位下に用い

たことについては、黒坂伸行「史料寸見二題」〔〕「平安王朝の宮廷社会」

吉川弘文館〔〕に詳しい。

以下四句は菅原文時「冬日聽第八皇子始讀御注孝經心製」中の句によ

る。「位纔正議大夫、官猶員外吏部、染學而老、倦朝而衰」〔〕「本朝文粹」

卷九〔〕

◎青紫高官、公卿の地位。青紫は漢代の公卿の印綬の色。「漢書、夏侯

勝、字長公。嘗云、仕（ママ）病不明。經術苟能明、取青紫、如俯拾

地芥耳」〔〕「書陵部本『蒙求』二六六「夏侯拾芥」〔〕「古語云、明經取青紫、

如俯拾地芥。斯言吾所服膺也」〔〕「本朝文粹」卷十二「詰眼文」三善清

行〔〕

◎太子賓客東宮學士の唐名。白居易が太子賓客であったことは有名。「東

宮學士云、今号太子賓客」〔〕「拾芥抄」官位唐名部〔〕「授太子賓客帰洛」

「白氏文集」二二七四題〔〕「唐太子賓客白樂天、愛而為我友」〔〕「本朝文

粹」卷十一「冬夜守庚申、同賦修竹冬青心教」藤原篤茂〔〕

◎黃綺商山の四皓の中の夏黄公と綺里季の二人。商山の四皓は秦末の

戦乱の中で商山に逃れ隠れた四人の隠者。「留侯曰」略「願上有不能致

者、天下有四人、四人者年老矣。皆以為上慢侮人、故逃匿山中、義不

為漢臣。一略「四人従太子。年皆八十有余、鬚眉皓白。衣冠甚偉。上

怪之、問曰、彼何為者。四人前対、各言名姓。曰、東園公、甬里先生、

綺里季、夏黄公」〔〕「史記」「留公世家」〔〕「人間有黃綺 地上散松喬」〔〕「白

氏文集」三一九六「冬初酒熟又一首」〔〕

◎時人その時の人。その時集まった人々。「未得天子知 甘受時人嗤」

「白氏文集」三三三「寄唐生詩」〔〕「豈唯士安高尚、時人号為書淫」〔〕「菅

九六〇「小庭亦有月」など。

◎波心ハ波の心。「矧亦水銜山影 山任波心」(『本朝文粹』卷八「晚秋遊淳和院、同賦波動水中山」源順)。「任進退於波心 亦不知趙女不知漢女者乎」(『江吏部集』卷下「暮春侍宴左丞相東三条第、同賦渡水落花舞応製」(『本朝麗藻』卷下『本朝文粹』卷一〇所収))

◎巡行ハめぐりゆく。酒席で盃を廻し飲みすること。ここは水に浮かべた盃が流れていく様をいう。「玉盃淺酌巡初匝」(『白氏文集』二四四三「泛太湖書事。寄微子」)。「授御盃之後、飲巡行如常」(『西宮記』卷二十「酒座事」)

◎醉郷ハ氏之俗ハ醉郷は酒に酔った境地をたとえた架空の国。唐の王績の「醉郷記」による。「醉之郷、去中国不知其幾千里也。一略一阮嗣宗、陶淵明等十数人、並遊於醉郷。没身不返、死葬其壤。中国以為酒仙。嗟乎、醉郷氏之俗、豈古華胥氏之国乎。一略一」(『全唐文』卷百三十二「醉郷記」王績)

◎鄭泉ハ三国、呉の人。性、酒を嗜み、美酒を満たした五百斛缸を得ることを願った。「呉書、鄭泉博学有奇姿。而性嗜酒、閑居。毎日願得美酒滿五百斛缸、以四時甘肥置兩頭、反復没飲之。億即住而啖肴膳。酒有升斗減、隨即益之。不亦快乎」(『芸文類聚』人部十 言志)

◎酒徳頌之文ハ『蒙求』「劉伶解醒」の故事で知られる魏の劉伶が著した文章。「有大人先生。天地為一朝。萬期為須臾。一略一唯酒是務。焉知其餘。一略一」(『文選』卷四十七)

◎巴ハ曲水の曲がりくねった様子を巴の字形にたとえる。「三巴記曰、閬白二水合流自漢中至始寧城下入武陵。曲折三曲、有如巴字。亦曰巴江」(『太平御覽』卷六五「巴字水」)。「香鑪峯隱隱 巴字水茫茫」(『白氏文集』一一一一「郡齋暇日、憶廬山草堂、兼寄二林僧社三十韻。多叙貶官以來出處之意」)。「曲水雖遙、遺塵雖絶、書巴字而知地勢、思魏文以玩風流」(『菅家文章』卷五「三月三日、同賦花時天似醉、応製序」(『本朝文粹』卷十、「和漢朗詠集」上「三月三日」所収))

◎槐庭ハ大臣の位。周代、朝廷に槐を植え、三公がこれに向かつて坐したので言う。「居槐庭而非用、庶幾松子於長生」(『本朝文粹』卷四「入道大相国謝官文書内覽復上表重」大江匡衡)

◎桃源ハ桃源郷。ここでは世俗を離れた風流の地の意味。↓十一「七言五月五日陪内相府池亭同賦雲峯入夏池応教一首」(『桃源』の項参照。

◎鶴群ハ朝廷の高官達。鶴鸞、鶴列に同じ。「謫辞魏闕鶴鸞隔 老人廬山麋鹿随」(『白氏文集』九二四「宿西林寺。早赴東林滿上人之会。因寄崔二十二員外」)。「初趁槐路随鶴列 更願松門愧鶴情」(『扶桑集』卷七「黃門署尚書竟宴、各詠句得野無遺賢」大江朝綱)。「羽林馮翊鶴鸞侶 吏部肥州錦繡詞」(『江吏部集』卷上「冬夜与諸君談話」)

◎鳳藻ハ優れた文章。「謁龍王於武帳、揮鳳藻於文昌」(『釈疾文』盧照鄰)。「以政典為琴箏ハ政典は先王の政を記した書。政典を琴箏のように扱う。「隱士以三墳為金玉、五典為琴箏、講肆為鐘鼓、百家為笙簧」(『太平御覽』卷六百八学部二所収「抱朴子」)

小さな流れであることから、物事の始まりをいう。「夫江始出於岷山。其源可以濫觴。及其至於江津、不舫舟、不避風、則不可以涉」へ「孔子家語」三恕へ「惟岷山之導江、初發源乎濫觴」へ「文選」卷二二「江賦」郭璞へ

◎聖主||徳の優れた天子。天子の尊称。

◎親舅||母の兄弟。叔父。一条天皇の母詮子は道長の姉。「伏惟、忠仁公德崇功大、仁義兼資。況先帝之親舅、陛下外祖」へ「本朝文粹」卷四「為昭宣公辞撰政上太皇第一表」菅原道真へ

◎洛陽||京都の東側。「東京号洛陽」へ「拾芥抄」京程部へ

◎輔佐||助ける、助力する。「故能飾大義、審時節、上以礼神明、下以義輔佐者、明君之道也」へ「管子」君臣下へ

◎物色||風物、景色。「遙光泛物色」余韻吟天籟へ「全唐詩」卷三五五「客有為余話登天壇遇雨之状因以賦之」劉禹錫へ「爰都督大王 賞以物色 命以芳遊」へ「江吏部集」卷中「七言初冬於都督大王書齋同賦唯以詩為友心教詩」へ

◎卿士||公卿。「王公卿士、皆是竜尾之昔臣」へ「本朝文粹」卷一〇「暮春同賦落花乱舞衣応太上皇製」大江朝綱へ「卿士大夫、侍座者濟濟焉」へ「本朝文粹」卷一一「一条院御時中宮御産百日和歌序」藤原伊周へ

◎大夫||五位の官人。「伏読去二月十五日詔、遍令公卿大夫」へ「本朝文粹」卷二「意見十二箇条」三善清行へ

◎仙郎||蔵人の唐名。「蔵人〔貫首 仙籍 仙郎 夕拝 夕郎〕」へ「拾芥

抄」官位唐名部へ「蓬居雖恥仙郎到」へ「本朝麗藻」卷下「白河山家眺望詩」藤原公任へ

◎儒吏||儒者で官吏でもある者。

◎一物以上||一物は逸物に同じ。優れたもの。並外れたもの。「故両浙之間、一物已上、想皆在目」へ「白氏文集」二七一七「想東遊五十韻」序へ「依弘仁八年十二月廿三日格旨、一物以上宮司可受領者」へ「平安遺文」延長七年七月一四日「伊勢国飯野莊大神宮勸注」へ「消息云、天慶七年者、一物以上自中宮被給如此」へ「九曆」天曆四年七月二四日条へ

◎連賓榻||客用の座席を設ける。「澄觴滿金疊 連榻設華茵」へ「文選」卷三〇「擬魏太子鄴中集詩八首其一」謝靈運へ

◎詞華||立派な詩文。「志業過玄晏 詞華似欄衡」へ「白氏文集」二八六三「哭皇甫七郎中」へ「子伝儒家之累葉 開翰苑之詞華」へ「本朝文粹」卷三「弁散楽」村上天皇へ

◎汎羽觴||盃を浮かべる。羽觴は酒盃のこと。「象筵鳴宝瑟 金瓶汎羽卮」へ「羽卮即羽觴也」へ「文選」卷三〇「三月三日率爾成篇」沈約へ

◎文章||文章に同じ。「詞無警策 何思文章之立駱前」へ「本朝文粹」卷三「論運命 对」大江朝綱へ

◎浅深||浅いことと深いこと。程度。分量。「訪七略而叩門戸 涉九流而酌浅深」へ「本朝文粹」卷六「為賀茂保憲請以所帯爵讓親父忠行状」大江朝綱へ酒の量を「浅」「深」で表す例は「浅酌一盃酒 緩弾数弄琴」へ「白氏文集」三六七「食飽」へ「請客稍深酌願見朱顔酡」へ「白氏文集」二

【押韻】

○○×××○^(上平声哈韻) ○×○○××○ (上平声灰韻) 哈同用
 ×××○○×× ×○○××○○ (上平声灰韻)
 ○○○×××× ○×○○××○ (上平声哈韻)
 ○×○○○×× ×○○××○○ (上平声哈韻)

【製作年次】

寛弘四年三月三日「三月三日庚子」略「今日左大臣（道長）於上東門第、設曲水宴、題云、因流汎酒」へ『日本紀略』寛弘四年「三日、庚子、有曲水会。東渡^ト所板院東西立草整・硯台等、東對南唐廂上達部・殿上人座、南於廊下文人座。辰時許大雨下、水辺撤座。其後風雨烈、廊下座雨入、仍對内儲座間、上達部被來、就座。新中納言（藤原忠輔）・式部大輔（輔正）兩人出詩題、式部大輔出因流汎酒、用之。申時許天氣晴、水辺立座、上下居。羽觴頻流、移唐家儀、衆感懷。入夜昇上。右衛門督（齊信）・左衛門督（公任）・源中納言（俊賢）・新中納言・勘解由長官（有国）・左大弁（行成）・式部大輔・源三位（則忠）、殿上地下文人廿二人。四日、辛巳、文成。就流辺清書。立流下、立廻草整、講詩。池南廊樂所數曲有声。昨日舞人着重衣、今朝位袍。講書了間被物、納言直衣・指貫、宰相直衣、殿上人或絹掛、或白掛、五位单重、殿上六位袴、自余疋絹。序匡衡朝臣（大江）、講師以言（大江）」へ『御堂関白記』寛弘四年三月」

【語釈】

◎因流汎酒 詩題は晋の東哲の言葉による。「武帝嘗問摯虞三日曲水之義、虞對曰、漢章帝時、平原徐肇以三月初生三女、至三日俱亡。邨人以為怪、乃招攜之水浜洗祓、遂因水汎觴。其義起此。帝曰、必如所談、便非好事。哲進曰、虞小生、不足以知。臣請言之。昔周公成洛邑、因流水汎酒、故逸詩云、羽觴隨波。又秦昭王以三日置酒河曲、見金人奉水心之劍、曰、令君制有西夏。乃霸諸侯、因此立為曲水。二漢相緣、皆為盛集。帝大悅、賜哲金五千斤」へ『晋書』東哲伝へ『統齊諧記』にもほぼ同内容の文を載せる。『芸文類聚』「三月三日」は『統齊諧記』を引く。

◎曲水 前項、及び十一「七言五月五日陪内相府池亭同賦雲峯入夏池応教」の「曲水」の語釈参照。

◎成王 周の第二代の王。武王の子。即位したときまだ幼少だったので、叔父の周公旦が、政治を補佐した。「武王有瘳、後而崩。太子誦代立。是為成王。成王少、周初定天下。周公恐諸公畔、周公乃撰行政当国」へ『史記』「周本紀」

◎周公旦 洛陽 成王が成長した後、都を洛陽に移そうとして、周公が卜し、結果が吉だったために洛陽に都を営んだ故事。「成王在豊。使召公復營洛邑、如武王之意。周公復卜申視、卒營築居九鼎焉。」へ『史記』「周本紀」

◎濫觴 さかずきを浮かべる。大河もその源はやっと盃が浮かぶほどの

隔青紫而命薄

青紫を隔てて命薄し

職只太子賓客

職は只太子賓客

垂黄綺而齡傾

黄綺に垂ぎて齡傾きぬ

誤為唱首 謂時人何云爾

誤りて唱首と為りぬ 時の人何をか謂はむ

と云ふこと爾り

時人得処坐青苔

時の人処を得て青苔に坐す

汎酒清流取次廻

酒を清流に汎かべ次を取りて廻る

水瀉右軍三日会

水は瀉く右軍三日の会

花薰東閣萬年盃

花は薰る東閣萬年の盃

巡行波月応明府

波月を巡行するは明府に応じ

斟酌沙風是後來

沙風に斟酌するは是れ後來なればなり

扶醉初知春可樂

醉に扶けられ初めて知りぬ春の樂しむべき

ことを

魯儒猶耻洛陽才

魯儒猶ほ耻づ洛陽の才

【校異】

1. 汎—沈(内、陽、国、東A、B、島、京、山、祐、岡、鶴、多) —

沈〔ミセケチシテ汎ト傍書〕(静) — 沈〔泛粹ト傍書〕(賀) — 浮(東北) —

泛(神、粹) 2. 濫觴今聖主之親舅左丞相亦宅洛陽而—ナシ(京)

3. 暇—假(内、島) 4. 色—包(島) 5. 方今—亦方今(陽、京、祐) —

方今〔於是粹ト傍書〕(賀、東北) — 方今〔一本於是ト傍書〕(岡) — 於是

(粹) 6. 卿—仰(底本、陽、静、東A、東B、京、祐、鶴) (内、国、

島、賀、山、神、岡、東北、多、粹) 二依ッテ改ム) 7. 以上—已上(内、

国、静、東A、B、島、京、賀、山、祐、神、岡、東北、鶴、多)

8. 辺—頭(粹) — 辺〔頭粹ト傍書〕(賀、岡山) 9. 汎—沈(内、国、

陽、松、山、鶴、多) — 沈〔汎粹ト傍書〕(賀) — 沈〔汎乎ト傍書〕(東A、

B) — 泛(祐、岡) 10. 草—章(陽、静、京、山、祐、神、岡、鶴) —

章〔草粹ト傍書〕(賀、東北) — 章〔草イト傍書〕(東A、B) — 草〔ミ

セケチシテ章ト傍書〕(内) 11. 波—彼(島) 12. 巡行—来処(粹) —

巡行〔来処粹ト傍書〕(賀、東北) 13. 氏—国(粹) — 氏〔国粹ト傍書〕

(賀、東北) 14. 誰—詩(陽、京、祐、岡、鶴) 15. 鳳—風(島)

16. 政典—典故(粹) — 政典〔典故粹誤ト傍書〕(賀、東北) 17. 才—身

(粹) — 才〔身粹誤ト傍書〕(賀、東北) 18. 濃—珍(粹) — 濃〔珍粹ト

傍書〕(賀、東北) 19. 但遇—但有遇(神) — 但遇〔有粹ト傍書〕(賀、東

北) 20. 耀—耀〔輝粹ト傍書〕(賀、東北) 21. 淪—倫(島) 22. 者—

之者(粹) — 者〔右上ニ之ト傍書〕(賀、東北) 23. 黄—莫(祐)

24. 誤—謬(粹) 25. 何—ナシ(京) 26. 〔以下ノ詩ナシ〕(粹)

27. 汎—沈(内、国、陽、東A、B、島、山、祐、岡、鶴、多) — 沈〔汎

ト傍書〕(静) — 沈〔汎乎ト傍書〕(賀、東北) 28. 扶—杖(内、国、静、

東A、B、島、賀、山、神、東北、鶴、多)

十六 七言三月三日侍左相府曲水宴同賦因流汎酒應教詩一首

〔以廻為韻并序〕

夫曲水之本源、其來尚矣 夫れ曲水の本源、其の來ること尚しひき

昔成王之叔父周公旦 昔成王の叔父周公旦

卜洛陽而濫觴ト 洛陽を卜して濫觴す

今聖主之親舅左丞相 今聖主の親舅左丞相

亦宅洛陽而宴飲 亦洛陽に宅して宴飲せり

蓋乘輔佐之余暇 蓋し輔佐の余暇に乘じて

惜物色之可賞也 物色の賞すべきを惜しむなり

方今 方に今

卿士大夫仙郎儒吏之 卿士大夫、仙郎、儒吏の

工詩天下一物以上 詩に工なること天下の一物以上

連賓榻於林辺 賓榻を林辺に連ね

尽整詞華之冠 尽く詞華の冠を整ふ

汎羽觴於水上 羽觴を水上に汎かべ

頻酌文章之酒作草 頻りに文章の酒を酌む

至彼 彼の

献酬之淺深任波心 献酬の淺深 波心に任せ

巡行之遲速經岸脚 巡行の遲速 岸脚經るに至りては

醉鄉氏之俗 醉郷氏の俗

伴鄭泉而得水路

鄭泉を伴ひて水路を得

酒德頌之文

酒德頌の文

因巴字而添風情者也

巴字に因りて風情を添ふる者なり

於戲

ああ

何処不賞今日之花水

何れの処にか今日の花水を賞せざらん

而居槐庭遊桃源者猶稀

而かうして槐庭に居て桃源に遊ぶ者

誰人不感此地之風流

誰が人か此の地の風流に感ぜざらん

而列鸕群振鳳藻者有限

而かうして鸕群を列ね鳳藻を振るふ

者限り有り

者限り有り

今日之事盛矣

今日の事盛んなり

優哉我相府

優なるかな我が相府

薦賢之樂調妙

賢を薦むるの樂調べ妙なり

以政典為琴箏

政典を以て琴箏と為す

養才之菓味濃

才を養ふの菓味濃し

以道德為梨棗

道德を以て梨棗と為す

何唯妙舞清歌之悅耳目

何ぞ唯妙舞清歌の耳目を悦ばし

綺肴玉饌之堆盃盤而已

綺肴玉饌の盃盤に堆きのみならんや

但遇花少榮耀

但花に遇ひて榮耀少なく

対水耻沈淪者

水に對ひて沈淪を耻づる者あり

位纔正議大夫

位は纔に正議大夫

江吏部集試注(五)

木戸裕子

(承前)、(四)は『文献探究』第三七号に掲載している。

凡例

- 一、底本は板本群書類従を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。
- 一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。
- 一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

- 内閣文庫(旧浅草文庫)本―(内) 山口県立図書館本―(山)
- 陽明文庫本―(陽) 祐徳稲荷本―(祐)
- 静嘉堂文庫本―(静) 神宮文庫本―(神)
- 国会図書館本―(国) 無窮会図書館本―(無)
- 東大図書館(E45 656)本―(東A)
- 東大図書館(旧南葵文庫)本―(東B) 岡山大学図書館本―(岡)
- 島原松平文庫本―(島) 東北大学図書館本―(東北)
- 京大図書館本―(京) 多和文庫本―(多)
- 賀茂別雷文庫本―(賀)
- 名古屋市立鶴舞中央図書館本―(鶴)

本朝文粹(新日本古典文学大系)―(粹)
本朝麗藻(校本本朝麗藻)―(麗)

一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は底本の字体を尊重した。

煙・烟 花・華 叢・藜 窓・牕など。

一、割注など小書の部分は「」に入れて示した。

一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

※補遺『江吏部集』試注(三)(『鹿児島県立短期大学紀要』第四九号)の十番「仲春庚申夜陪員外藤納言文亭同賦夜坐聽松風」詩序の二行目の「日新其徳」、及び十一番「七言五月五日陪内相府池亭同賦雲峯入夏池」詩題の出典について、後藤昭雄氏より御教示をいただいた。深く御礼申し上げます。

◎日新其徳 日々その徳を新たにす。「大畜、剛健篤実、輝光、日新其徳」
〈『易』大畜「彖伝」〉

◎雲峯入夏池 梁、庾肩吾「侍宴錢湘州刺史張纘」による。「雨足飛春殿
雲峯入夏池」

※本稿では卷上十六番詩序と詩を取り扱う。